

皇室の美術振興 古筆・絵巻・古文書 公家の書

皇居三の丸尚蔵館（皇居東御苑内） 前 24. 10. 29～11. 24 後 11. 26～12. 22



「皇居三の丸尚蔵館」は、1989（平成元）年に上皇陛下と香淳（こうじゅん）皇后により、皇室に代々受け継がれた美術品が国に寄贈されたことを機に、その保存と研究、公開を目的とし1993（平成5）年に皇居東御苑内に開館した。

今回の展覧会では、**公家の書—古筆・絵巻・古文書「13件」**と、**皇室振興—日本近代の絵画・彫刻・工芸「25件」**の優品が競演して展示されている。

川端玉章（かわばたぎょくしょう）《浜離宮春秋図》

1882（明治15）年 絹本着色 チラシの左図

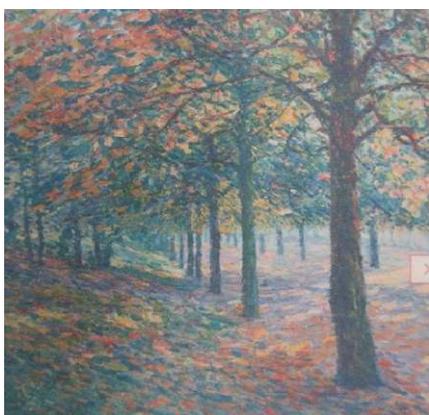
「玉章」は、幕末に京都から江戸に移り、明治期を通じて在東京の正統派的円山派画家として活躍をしたが、実際には同派の写生的態度と西洋画法の融和を試みた明治20年代後半の作品のみを目にすることが多い。その中で本作品は、画面の隅々まで伝統的円山派の丹念な筆致が息づいていた時期の数少ない代表的な現存作品として貴重であるとされている。



荒木寛畝 《孔雀図》1890年 紙本着色

細部まで迫進的かつ絢爛な洋風の写実描法でとらえた「孔雀」に対し、「桜」や「蝶」は濃淡を備えた柔らかな筆使いで描かれている。

一方、「岩肌」の描写は陰影の深い立体感豊で、異なる筆法が巧みに組み合わされた明治中期の傑作中の傑作品であるとされている。



太田喜二郎 《並木道》1914年
ベルギー仕込みの印象派



池上秀畝 《秋晴れ》（左隻）1915年 紙本着色
美しき信州の山に魅せられて